

琉球大学学術リポジトリ

沖縄戦をめぐる言説 — 「白い旗」の少女をめぐる
て—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2009-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲程昌徳, Nakahodo, Masanori メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9967

沖縄戦をめぐる言説

——「白い旗」の少女をめぐる

仲 程 昌 徳

はじめに

一九五〇年八月十五日『沖縄戦記 鉄の暴風』、一九五一年七月十日『沖縄の悲劇——姫百合の塔をめぐる人々の手記——』そして一九五三年六月五日には『沖縄健児隊』が刊行される。一九五〇年代に入って相次いで刊行された三冊の沖縄戦関係図書は、最初の一冊が「住民側から見た」記録になるものであり、二冊目が女子「生徒の手記を集めて編纂」されたものであり、そして三冊目は「沖縄師範学校男子部の職員生徒隊」の手記を集めたものであった。

三冊の戦記は、そのように異なる体験記録をそれぞれに纏めたものであるが、そこには共通して強調されていたことがあった。

① 幸か不幸か、当時一県一紙の新聞紙として、あらゆる戦争の困苦と戦いながら、壕中で新聞発行の使命に生きた、旧沖縄新報社社員は、戦場にあつて、つぶさに目撃体験した、苛烈な戦争の実相を、世の人々に報告すべき責

務を痛感し、ついに、終戦四年目の、一九四九年五月、本書編集を、旧沖縄新報社編集局長、現沖縄タイムス社理事豊平良頭（監修）、旧沖縄新報社記者、現沖縄タイムス記者牧港篤三（執筆）、現沖縄タイムス社記者伊佐良博（執筆）、の三人に託し、一年を経て、上梓の運びに至った。

②この記録は文学でもなく、生き残った生徒の手記を集めて編集した実録であり、氏名も日時も場所も正確を期した。

③私達はこの本の、表現や文章の巧拙は兎も角として、読者に願うことはこゝに記された事実そのものに目を向け、声なき人々の声をきいていたゞきたいとあります。

①は、『沖縄戦記 鉄の暴風』の「まえがき」、②は『沖縄の悲劇——姫百合の塔をめぐる人々の手記——』の同じく「まえがき」、③は『沖縄健児隊』の「はしがき」に見られるものである。三冊ともにその序言で、収録した証言や手記が「実相」であり「実録」であり「事実」であることを強調していた。そしてそれは、三冊だけでなく、恐らく沖縄戦の証言を収録した編著に共通して見られるものであるといつていいだろう。

戦記、とりわけ戦争体験記録が「実相」「実録」「事実」に基づいていることを強調しているのは不思議なことではない。戦場の現場は、信じられないような出来事が次から次へと起った。その信じがたい出来事を写し出そうとすればするほど「事実」だといひ「実録」だといひ「実相」だといひことを強調しなければならなくなるはずだからである。

しかし、「事実」だといひ「実録」だといひ「実相」だといわれた記録が、必ずしもそうでない場合が多々あった。

その一つが、座間味島で起った事件の場合である。

母が私に、「『悲劇の座間味島』で書いた『集団自殺』の命令は、梅澤隊長ではなかった。でもどうしても隊長の命令だと書かなければならなかった」と語りだしたのは、一九七七（昭和五二）年三月二六日のことだった。その日は、座間味島で「集団自殺」をした人たちの三三回忌であった。

宮城晴美は『母の遺したもの 沖縄・座間味島「集団自殺」の新しい証言』（二〇〇〇年二月六日、株式会社高文研）の中で、そのように書き、その後で、

慰霊祭が終った日の夜、母は私に、コトの成り行きの一部始終を一気に話しだした。梅澤戦隊長のもとに「玉砕」の弾薬をもらいに行ったが帰されたこと、戦後の「援護法」の適用をめぐる結果的に事実と違うことを証言したことなど、そして「梅澤さんが元氣な間に、一度会ってお詫びしたい」とも言った。（中略）

しかし、「事実」を公表するには助役の宮里盛秀の名をあげなければならず、それをすれば助役の遺族に迷惑がかかってしまうと、母は苦しみを一人で背負っていた。

と続いていた。

座間味島で起った「集団自殺」は、「梅澤部隊長」の命令によるものであると証言した当の本人が、「三十三」年目になって、それは「事実」ではなかったと語ったというのである。

座間味島の戦争記載に関していえば、「自決命令」を下したとされる「梅澤部隊長」について、『鉄の暴風』の初版は、「隊長梅沢少佐のごときは、のちに朝鮮人慰安婦らしきもの二人と不明死を遂げたことが判明した」と書いていた。

『隊長梅沢少佐』の「不明死」記載は、単純な誤りであった。『鉄の暴風』は、のちその部分を削除することになるが、「命令」に関しては、単純な誤りとして片付けられるようなものではない。そこには、戦争のもたらしたむごたらしい現実が鮮明に映し出されていた。

『母の遺したもの』や『鉄の暴風』に見られる事例からわかるように、戦記が強調している「真相」「実録」「事実」について、あらためて検証しなければならないことが多々あると断言していいし、そこにはさらに、次のような問題もあった。

（生き残つてから後の或る日、フト私は増永隊長の命令とこの叱責を心の中で反芻してハツとした。逃げるとか生きるとかいうことを絶対のタブーとした日本軍隊のあの厳しい軍律の中で、隊長は暗黙の中に私達に何を命じたのかに、やっと気がついたのだ。年少のために、その時は、私達は隊長の真意を了解し得なかつたのだ。）

『沖繩健児隊』に収録された大田昌秀の「血であがなつたもの」の中に見られる一文である。大田はのちその部分を収録した『沖繩のころ——沖繩戦と私——』（一九七二年八月二十一日、岩波書店）を刊行するが、同書ではその部分が削除されている。削除は、大田が、沖繩戦を研究していく過程で判明した結果に基づいてなされたものであった。それは、人道的な観点に立つてなされていた戦時の言動の解釈が、いかに甘いものであったかという

ことを知らされたことによる苦い削除であった。¹

「真相」だと思つて書いたことが、実は誤りであつたということ、大田の削除は見事に語るものとなつていたといつていいだろうが、戦記は、またそのように書き改められていくなかで「事実」が再浮上してくるものでもあつたのである。

一、「りゅう子の白い旗」をめぐる

大田昌秀は、「血であがなつたもの」を発表して以来、同手記を踏まえて『沖縄のこころ』『沖縄健児隊』そして『血であがなつたもの 鉄血勤皇師範隊 少年たちの沖縄戦』（二〇〇〇年七月三十一日 那覇出版社）を刊行しているが、その過程で、一九七七年九月七日『写真記録 これが沖縄戦だ』を刊行している。写真は、米軍によつて撮られたものを、大田が独自に調査し収集したもので、これまで知られてなかつたのが数多く集められていた。

その一枚である白い旗を掲げた少女の写真も、大田の写真集で始めて紹介される。² 大田がその写真を貴重な一枚だと認識していたことは、『鉄血勤皇隊』の巻頭に使っていることから窺える。その白い旗を掲げる少女の姿が、やがて記録映画で紹介されるに及んで大きな反響を呼んでいく。³

文・新川明 版画・儀間比呂志の『りゅう子の白い旗 沖縄いくさものがたり』（一九八五年八月一日、築地書館）も、その反響の一つであつた。

『りゅう子の白い旗』は、「いまから四十年まえのお話です」として、戦争のあつた「島」の紹介から始まる。

からだの中まで青く染めてしまいそうな

ふかい色をした空と海につつまれて

りゅう子の島はうかんでいました。

書き出しの部分である。

『りゅう子の白い旗』の「文」を担当した新川は、「島」を紹介していくのに「りゅう子の島」と書いていた。「りゅう子の島」が、どの「島」を指すのかは、その後に続く古語、生物、植物、果実、習慣、産物、芸能、自然等の描写によって明らかである。

新川は、なぜそれを明示しないで「りゅう子の島」としたのだろうか。勿論、それは、そのような表現をすることで主人公を前景化したということはあるが、少なくとも、沖繩の表現を見つけてきたものには、興味深いものがあるはずである。

それは他でもなく山之口獺の「会話」を思い起こさせるものがあるからである。「沖繩」といわずに「沖繩」を鮮明に映し出していく、いわば迂回的な表現になる「会話」の方法を用いて書かれたもので、そのことを下敷きにすることで、沖繩の悲劇の多層を示唆しようとしたといえるのである。

そしてそのような重層化は、例えば、「鉄の暴風」と「暴風雨」とを併記しているところにも現れているように。

「りゅう子の島」の紹介のあと、いわゆる「十五年戦争」が「アジア・太平洋戦争」であったことを国名、地域名を列挙していくかたちでそれとなく示す。

やがて「りゅう子の島」にも「日本軍」がやってきて、戦争の準備を始める。そして「お前たちを守ってやるか

ら心配するな！」というセリフが記され、沖縄戦の前兆となる那覇を廃墟にした十・十空襲に触れたあと、日本軍が吹聴したあと一つのセリフ「上陸してきたら、やつつけてやる！」という言葉が記してある。二つの言葉は、「日本軍」の言動を映し出していく際、落とす事のできない用語であった。

アメリカ軍の上陸と日本軍の作戦についての説明がなされ、りゅう子たちが住む村も危なくなってきたところで、りゅう子と彼女の家族が登場してくる。りゅう子の登場は、避難のため家を離れていくところから始まる。

りゅう子には祖父父母がいる。二人は、先祖を祀つてある家を離れることはできないとして留まることになり、りゅう子は母と弟の三人で村を出ることになる。父が登場しないのは、「召集」されたことによるが、それははからずも老人、女性そして子供といった戦術を持たない弱い立場にある者たちが、置き去りにされたことを示していた。村を出たりゅう子たちは、南に向つて歩き続ける。りゅう子たちの避難行は、すでに村人が逃げ出した小さい村で空き家を見つけて隠れることから始まる。そして畑のあぜのくぼみ、お墓のなか、焼け跡の村の石垣のかけといった避難経路をたどっているうちに、アメリカ軍の防衛線に近づいてしまう。

森を抜け、原っぱを横切っている途中で、アメリカ軍の張り巡らした防衛線に触れ、機関銃が打ち出され母と弟が犠牲になる。かろうじて生き残つたりゅう子は、その後ガマを見つめる。入ることを許されただけでなく、祖父と遭遇する。そこへ、アメリカ軍が近づき攻撃を始めるとともに、投降呼びかけが行われる。ガマに潜んでいた隊長は、りゅう子に白い旗を持たせ、外に押し出す。りゅう子の後に日本兵たちが続く。

りゅう子の「戦争」は、そのようにして終る。

『りゅう子の白い旗』は、米軍に追われるようにして村を出て、戦場を逃げ惑い、辛うじて生き残り、白い旗をかざしてガマを出ていくまでを書いていくが、そこには、次のような光景が映し出されていた。

- 1、南部の村人たちが逃げ出した村
- 2、墓に隠れている人々
- 3、食糧の調達
- 4、日本兵たちの南下
- 5、アメリカ軍の偵察機トンボの飛来
- 6、砲弾で吹き飛ばされた墓のあとに転がっている死体
- 7、赤ん坊を抱いて子守唄を口ずさんでいる「女の人」の魂が抜けたような姿
- 8、作戦の邪魔だから墓から出て行けと迫る日本兵
- 9、「女の人」をスパイだといって斬ってしまう日本兵
- 10、母と弟の死
- 11、死体の乳を吸っている赤ん坊
- 12、池の周りで死んでいる日本兵、三つ編み姿のお姉さん
- 13、ガマに入るのを拒否する女の人
- 14、祖父との再会
- 15、日本兵の闖入、「沖縄語」を使うものはスパイとして処刑するとおどす日本兵
- 16、兵隊たちとふざけあう女
- 17、スパイ容疑で男の人を殺そうとする日本兵を方言で止めようとする祖父
- 18、アメリカ軍の攻撃と投降呼びかけ

19、おびえる日本兵

20、白い布を取り出しりゆう子に渡す隊長

21、武器をガマの奥に隠す日本兵

22、りゆう子を外に押しやる隊長

23、白い旗をかざすりゆう子

24、笑っているアメリカ兵

25、両手をあげてりゆう子のあとについてくる日本兵

26、風にはためく白い旗

『りゆう子の白い旗』は、りゆう子の「戦場」を描くのに、そのような情景を取り出して、沖繩戦を描いていくさい、必ず取り上げられていく情景というものがある。アメリカ軍の砲撃による死者と死者の乳房を吸う幼児、見捨てられる幼児、日本兵による壕追い出しやスパイ容疑による斬殺、非戦闘員の「集団死」、慰安婦たちといったのがそうであり、『りゆう子の白い旗』も、当然それらを取り上げていた。

『りゆう子の白い旗』は、しかし、ただ単に沖繩戦を描いただけのものではなかった。それは「いまから四十年まえのお話です」と始まっているように、回想された沖繩戦と違っていいものであった。そして、四十年前の出来事が鮮明なのは、そのときのことの片時たりとも、心から離れたことがないということを示すものであった。『りゆう子の白い旗』が、単に戦場を描いた作品と異なるのはその点にあった。

りゆう子のねむれない夜は

りゆう子だけの夜ではありません。

たくさんのおかあさんが、おなじように

それぞれのくらい夜をだきしめながら

深いやみをみつめているのです。

めぐってくる季節といっしょに

きえることのない思いがよみがえって

つらくて重い夜がつづくのです。

最後の一節である。りゆう子が、四十年たつても、戦争のあつた時期になると、眠れなくなるのは「おかあさんと和男のすがた」や手をさしのべてくる「赤ん坊」や「首のない やけぼくいのような 死体」や「血に染まつた池」にゆれる「赤い月」や「日本兵のおそろしい顔」が甦ってくるためであるが、それは、決してりゆう子だけのものではなく、沖繩戦を体験したものの多くにみられるものであるというのである。

「いまから四十年まえのお話です」とはじめ「戦争がおわつて四十年」と締めくくつたのは、他でもなく「戦争」が一過性のものではないことを示すための工夫であつたが、そのことで、大切な問題が浮かび上がってくることになる。

それは、四十年たつて選り取られた「戦場」という問題である。

物語は、記録映画の一つの場面が語りかける衝撃的なメッセージをモチーフにしましたが、映画の少女の実体をそのまま再現したものではありません。そのため、実在する映画の少女には、あえて直接の取材はしませんでした。

新川明は『りゅう子の白い旗』の「あとがき」でそのように記していた。作品は、「実在する映画の少女」の実際に体験した「戦場」を描いたものではないということからして、「りゅう子」の戦場は、新川そして儀間の「記憶」のなかにある「戦場」から選ばれていたといっている。

では、実際に体験した「少女」の「戦場」はどのようなものであったのだろうか。

二、『白旗の少女』をめくって

比嘉富子の『白旗の少女』が刊行されたのは一九八九年四月二十日、『りゅう子の白い旗』が刊行されてから四年経っていた。

比嘉は、一九七七年、洋書店で「三角形の白旗をもった少女」の写真を見つけたこと、一九八四年テレビで紹介された記録フィルムで「白旗をもった少女」が紹介されたこと、⁴一九八七年十月、「白旗の少女」が自分であることを告白したこと、⁵一九八八年六月十一日、ニューヨークで行われた平和行進に参加して「白旗の少女」を撮ったカメラマンを探していることを訴えたこと、⁶その年、念願であった「白旗の少女」のスチール写真を撮った写真家に対面できたこと、⁷そして「四十三年ぶりに肩の荷がおりた。でも、これでわたしの沖縄戦がおわったわけ

ではない。あんな不幸なできごとをくりかえさないためにも、あの体験を語りつがなければ・・・。」と「心にきめた」ということを記した「まぶたのカメラマンをさがしもとめて」を巻頭において、『白旗の少女』を、その生い立ちから書き始めていく。

比嘉は、「九人きょうだいの末っ子」であった。九人のうち年長の姉二人が嫁にいき、年長の兄二人は兵隊にとられ、もう一人の兄が内地に出稼ぎに行っていて、家には四名の兄弟と両親とが暮らしていたが、米軍の空襲が始まっていく直前の一九四四年三月母が亡くなる。

米軍が沖縄に上陸し、比嘉の住む首里にもアメリカ軍の攻撃が始まった五月十日前後のある日、軍の「食糧集めの仕事をひきうけていた」父が家を出て行ったまま行方不明になる。父の安否を尋ねにいった姉は、何の手がかりも得られなかった代わりに、首里は激戦地になるという情報とともに、一刻も早く南に逃げるようにいわれて戻ってくる。四名の子供たちは、父が出かける日の朝言っていた言葉を思い出し、家を後にする。

『りゅう子の白旗』は、祖父母が家に留まり、母親とりゅう子と弟の三人が南部に逃れていく設定になっていた。『りゅう子の白旗』が、「白旗の少女」をモチーフにしたが、全く別の物語になっていることは、その一点にもよく現れているが、なぜ祖父母を設定する必要があったのだろうか。

それは、当時の家が、複数世代同居を普通に行っていたということを踏まえているのだろうが、そのことよりも、沖縄の習俗・文化を照らし出すための方策、とりわけ方言の問題を際立たせるために設定されていたとみることができる。

『白旗の少女』は、子どもたち四人で家を後にする。その経緯は、おおよそ次のようになっている。

- 1、南へ
- 2、壕やガマに身をひそめる
- 3、瓦屋根の家に泊まるのを断られる
- 4、ガマに身をひそめる
- 5、父を探す
- 6、海岸へ出る
- 7、浜辺で砂を掘ってねる
- 8、兄の死、埋葬
- 9、姉達にはぐれて、一人になる
- 10、戦火から逃れるつもりで、戦場のど真ん中をさまよう
- 11、アリの群がる死者の雑糞を開ける
- 12、ネズミに出会う
- 13、ウサギに救われる
- 14、姉たちをさがして壕から壕へと声をかけて歩く
- 15、日本刀をふりかざす兵隊に追われる
- 16、崖を落下する
- 17、川に出る
- 18、海に出る

- 19、穴を見つける
- 20、ガマに入る
- 21、おじいさん、おばあさんとの三人の生活が始まる。
- 22、米軍の投降呼びかけが始まる
- 23、フンドシで三角の旗をつくる
- 24、ガマを出す
- 25、白旗を掲げて歩く
- 26、写真を撮られる
- 27、日本兵との合流
- 28、名前、住所を聞かれる
- 29、姉たちとの再会

「白旗の少女」のたどった経路を示せば、ほぼそのようになるであろうが、忘れてならないのは経路ではなく、彼女が遭遇した戦場の出来事である。そのことについて、彼女は「その不気味さとおそろしさは、いまでさえ、思いたすとぞくつと背筋が寒く」なるとして「昼間は、行く先々に掘つてある壕とか、ガマをみつけて身をひそめ、思夜になると歩きたすのですが、すこし歩くと照明弾があたりを真昼のように照らしだし、たちまち砲弾が飛んで」きたことや、「いまもってわたしの目に焼きついてはなれず、ときどき夢にまで見るおそろしい光景」として「それは、砲弾の破片が爆風にでもやられたのでしょう、胸から血を流してぐったりとしている母親の胸で、その流れ

る血をすすっている一歳くらいの赤ちゃんの姿です。わたしは、それを目のあたりにした瞬間、その場に立ちすくんでしまいました。／赤ちゃんは、わたしたちをみつけると、口といわずほほといわず、顔じゅう血まみれにしながら、「だっこして。」とでもいうように、両手をのばしてくるのです。その両手も母親の血で真っ赤にそまっています」といった光景、「四十数年たつたままでさえ、夢のなかにあらわれて、わたしを苦しめる」ものとして「どろんこの手でわたしの足首をつかみ、虫の息であつたにもかかわらず、日本軍の優勢をよろこび、日本の勝利を信じつつ、最後の氣力をふりしぼって、「バンザイ!」といって、息をひきとつた」兵隊のこと、また「なかでも、忘れることができないのは」として「日本刀をふりかざした兵隊さんに追われ、もうすこしできりすてられるというめにあつた」といったこと、さらには「そのときのことを、なんと表現したらいいのでしょうか。地獄図絵：そんな言葉でしか、いいあらわせないような光景でした」として「はなれたところから、ようすを見たときには気づかなかつた兵隊さんもありました。おじいさんもいました。子どもをおんぶしたままのお母さんがいました。子どももその背中で死んでいました。川のなかほどを、流れのあちらこちらにある石にさまたげられながら、ゆっくり川下へと流されていく死体もありました。ぜんぶで、およそ百人ほどの人たちだつたでしょう。その人たちのなかに、ヨシ子姉さんがよくやつていた、髪を三つあみにした若い女の人がいまして」といった出来事をあげているが、彼女が遭遇したのはそのような光景、ただであつたわけではない。

彼女が遭遇したその他の出来事をあげていけば、次のようになるであろう。

一、とつぜん、頭の上でものすごい爆発音がしたかと思うと、全身火だるまになった人が、山の斜面をころがり落ちていきました。

二、五、六人の兵隊さんがやってきて、

「どけどけど。ここでまもなく戦闘がはじまるぞ。はやくほかへいけっ！」
と大声でどなりました。

三、わたしは、夜になるのを待てず、また日のあるうちからガマをぬけ出し、あちこちのガマからガマへとわたつて、「ネエネエツ、ネエネエツ。」といいながらのぞいては、先にガマに住んでいる人たちから、シツシツと、まるで犬か猫のように追いだされるしまつでした。

四、じつと見つめていると、幽霊だと思つたのは、人の上半身で、白いの、兵隊さんたちがよく着ている襦袢、木綿製の下着のシャツでした。そして、ゆらゆらとしていたのは、一人の兵隊さんが、前こみになつてもがいている姿でした。

なんであんなことしているのかな、とさらに目をこらすと、その人は、自分で自分の腹を短剣で切つていたのです。そして、死にきれずに苦しんでいたのです。「うーん、うーん。」という、うなり声が聞こえました。そしてそのうしろを見ると……。

あつ、もう一人兵隊さんがいたのです。その兵隊さんは、日本刀をもっていました。そして、苦しんでいる兵隊さんのうしろに立つて、両手をあわせておがむと、もがいている兵隊さんの横に立ち、刀をあげました。月明かりに、日本刀がキラツと光りました。

五、「ねえ、その女の子。逃げるなら、いまのうちよ！ もうすぐ入り口をふさいで、爆弾でみんなが死ぬのよ。それとも、わたしたちといっしょに死ぬ？」

わたしは、びくつと体をふるわせて、あわててガマをとびだしました。そして、できるだけ遠くへ逃げよう

と、崖をすべりおりました。

しばらくすると、うしろで大きな爆発音がして、谷間にゴウゴウとこだましました。

「少女」の戦場彷徨は、「切断された両手、両足」を白い布で巻いたおじいさんと「目が見えない」おばあさんとが避難していたガマに入ったことによつて終わる。そこは「少女」にとつて「心安らぐ天国のようなところ」であつた。そして「しみじみと幸福感を味わう」ことができたが、ときおり「忘れることのできないさまざまな、恐ろしい光景」が思い浮かんで来たとして、さらに次のような出来事が語られていた。

六、わたしは、一つのガマをみつけると、足音をしのばせ、姿勢を低くしてガマの入口に近づいていきました。

そのとき、ガマの中から赤ちゃんの泣き声がありました。そして、その声がだんだん近くに聞こえてくるのです。わたしは、とつさに物かげに身をひそめて、ガマの入り口をじつと見つめていました。

すると、大声で泣きつづける赤ちゃんをおぶつた若いお母さんが、四、五人の兵隊に押し出されるようにガマの入り口にあらわれました。お母さんは、ガマの中を指でさしながら、兵隊たちに何度も頭をさげました。きつと、中に入れてくださいとお願いしていたのだと思います。

しかし、兵隊たちは、お母さんを入れるどころか手で追いはらい、とうとうお母さんは、ガマの外に追い出されてしまいました。

お母さんは、ガマの入り口のところでしばらく立っていました。やがてあきらめたのか、首をうなだれて歩きました。

「危ないよ、そんなふうに立って歩いては危ないよ。」

わたしは、思わず心のなかでつぶやきました。

そのとたんです。ダダダツと機銃の音がしました。

お母さんの体が、クルクルクルツとコマのようにまわったかと思うと、バタツとたおれて、そのまま動かなくなりしました。その背中では、赤ちゃんがまだ泣きつづけていました。

そのとき、ガマから黒いかげがツツツと地面をほうようにしてあらわれ、たおれているお母さんのそばにかけよると、その背中から赤ん坊をひきはなして、岩かげに走りこんでいきました。赤ちゃんの泣き声がだいに遠くなつていつて、急に泣き声が聞こえなくなりしました。

七、わたしは、あるガマをみつけて、いつものように、注意ぶかく近づいていきました。すると、ガマの前の岩場に、おおよそ十五人ほどの兵隊さんがならんで横に寝かされ、日本刀を腰につるした一人の兵隊さんが、おそらく将校だと思いますが、その兵隊さんたちのそばを、いつたりきたりしているのです。

「なにをしているんだらう？」

わたしは、大きな木の幹のかげに身をひそめて、ようすをうかがいました。

どうやら、横になっている兵隊さんたちは、かなり負傷しているようすで、だれもあまり動こうとしません。そして、犬がひくくうなるような声にまじって、大きな、どなり声が聞こえます。

「助けてくれーっ。」

と悲鳴のような声。

「はやく殺せえ。」

とかすれた声。

「はやくらくにしてくれよう。」

と、おなかの底からしぼりだすような声。そして、

「お母さん……。」

「……子、さようなら。」

と、息もたえだえにさげぶ声……。

もう、思わず耳をふさぎたくなるような悲しいさげび声でした。

すると、日本刀を腰にした将校が、

「すまん、弾がたりんだ。これでがまんしてくれっ。」

というなり、ある兵隊さんの腰から短剣をぬくと、ならんでいる兵隊さんたちの左ののどをめがけてグサリと刺しました。

そのとたん、「ぐえーっ。」というか「ぐわっ。」というか、刺された兵隊さんがひと声さげんで、ぐったりと動かなくなりました。

「すまん、すまん、ゆるしてくれ。」

将校の人は、そういいながら、横になっている兵隊さんののどを一人一人短剣で突き刺しはじめました。

「やめろっ。やめてくれっ。」

ときげんで、おいおいと泣き出した兵隊さんもいれば、なんとか、はってでも逃げようとする兵隊さんもい

ました。

すると、将校の動きは、ますますはやくなり、まるで、えものにとびかかる猛獣のように、つきからつきへとかけ寄って短剣をふるうのです。

「少女」が、戦場で見たのは、そのような、兵隊たちのなんともいいようのない無惨な行為であったが、『白旗の少女』が、特異な戦記になっているのは、そのようなことを書いているところにあつたのではない。

そのような光景は、沖繩の戦記をめくれば、どこにでも見られるものであるといつていいのであり、『白旗の少女』が他に類を見ないものになっているのは、一人だけによる戦場の彷徨のあと、おじいさん、おばあさんとのガマでの生活が始まつたことによつて起つた出来事が記されている点にある。

アメリカ軍の投降呼びかけが始まると、おじいさんとおばあさんは、不自由な体で「三角の布」を作りあげる。そして「トミコ、ヒエーク、ウリ、ムツチ、ヒンギレー。(富子、はやく、これを、もつて、お逃げ。)」といい、「富子、それをもつていけば、ぜつたいに安全なのだ！それが世界中の約束だから、ほんとうにだいじょうぶなんだ！」といい、さらに「いいかね、外に出たら、その白旗がだれからでもよく見えるように、高くあげるんだ。まっすぐにだ。いいかね。高く、まっすぐにだよ。」という。

「少女」は、おじいさんのいつたことを守り、ガマを出て、「白旗」を高く掲げる。

『白旗の少女』が、他の戦記と異なるのは、「白旗」が何を意味するかを知つていた人物がいたということと同時に、「白旗」が間違いなくその人物のいつた通りのものであつたといつたことを伝えてある点にあつた。

「白旗」を高く掲げた少女の写真は、あと一つ別のかたちで撮られていた写真が記録映画として公開されるに

及んで、大きな反響を呼び起していった。そして、写真の少女が名乗り出たことでさらに反響が大きくなっていったといつていいが、その反響の大きさを示すものの一つが『りゅう子の白い旗』であった。

三、「白い旗」をめぐる

『りゅう子の白い旗』は、「白い旗」の場面を次のように描いていた。

つぎは、いよいよこちらのガマです。

日本兵たちは、おちつかなくなりました。

隊長も、さきほどとはうってかわって

おびえたように外のうごきをうかがっています。

「ここで自決しよう」

「いや生きのびてたかうべきだ」

兵隊たちが、いいあらそいをはじめました。

「おとなしく出れば殺さないとすだよ」

「では、だれがさいしよに出るのか」

「こういうときは、兵隊さんがさきだよ」

ほかの人たちもいいあつています。

「あなたたちは、そんなに死ぬのがこわいの！」

りゅう子をガマに入れまいとした女の人がさげびだすと

隊長はあわてて雑のう（ものを入れる袋）から

白い布をとりだしていいました。

「ために子どもをさきに出してみよう！」

「デテコイ、デテコイ」

よびかける声が、ガマのそとで聞こえます。

日本兵たちは、いそいで軍刀や鉄砲を

ガマのおくにかくしました。

「デテコナイト、コウゲキシマス」

隊長は、りゅう子の腕をとって

ガマの出口にいくと

そとへおしやりました。

（二連略）

ふりかえると、日本兵たちが

両手をあげてついできました。

おじいさんや女の人も

よろよろとつづいていました。

そのむこうに、ガマが黒い口をあげていました。

『りゅう子の白い旗』は、「白い旗」になる「白い布」を、隊長が「雑のう」の中から取り出したとしていた。そして、それを持たされたりゅう子は、隊長によって、外に押し出されたといったかたちになっていた。

『白旗の少女』と『りゅう子の白い旗』とは、そこが違っていた。前者は、命の大切さを作品の核にしていたといっているが、後者は、日本兵批判を前面に押し出したものとなっていたといっている。

白い旗を掲げる少女の記録映画を見て書かれた作品が、何故そのように日本兵の批判を眼目にした物語となったか。そのことを容易に解き明かしてくれるものとして、次のような一文がある。

画面で、白旗を掲げて先を行くのは幼い一人の少女である。やや遅れて日本兵が続く。前方には米兵が大勢待ち構えているだろう。

盛んに宣伝されたような「鬼畜」の米兵だとすればどんな事態でも起きかねない。しかし少女は助かった。日本兵も死なずにすんだ。兵士たちは少女の勇氣に心打たれただろう。対して日本兵には侮辱の視線を向けたはずだ。

自身の生死が米兵の思うがままという危急の場面で、自らが先頭に立ちえず後ずさり、少女に付き従い命を請

おうとする卑きようさ。一方、白旗の意味を知っていたかどうなのか、いぶかわれる年端のいかぬ少女の行動は、自発的というよりきつと日本兵の言いつけがあつてのことと見抜いたのである。

戦乱の中でいたいな沖繩の一少女を利用し身を守ろうとする日本兵のやり口。それは現在でもヤマト国の安泰に必要とされる在日米軍基地のほとんどを押し付けておき、その危険性を真つ先に沖繩人に被らせている政府のやり方と根太くつなぎ合っている。

一九九九年八月十日付き『沖繩タイムス』の投稿欄「わたしの主張あなたの意見」欄に「白旗の少女と在日米軍基地」と題して掲載された宮城順盛の文章の全文である。

宮城もまた、少女の掲げている「白旗」は、日本兵によって持たされたものであるという推測をしているが、それは、少女の後ろに「やや遅れて日本兵が続く」かたちになっていたことに基づいている。宮城は、日本兵が「少女を利用し身を守ろう」としたと見たのである。

隊長の雑囊から取り出された「白い布」を持たされ、外へ押し出されたと『りゅう子の白い旗』は書き、そして投書は「戦乱の中でいたいな沖繩の一少女を利用し身を守ろうとする日本兵のやり口」と書いていたが、「事実」はどうだったのだろうか。

『白旗の少女』には、おじいさんのフンドシをおばあさんが齒で噛み切つて三角形にしていく様子が書かれています。「白旗」を掲げて出れば、殺される事がないということを知っていたのは、兵隊ではなくおじいさんであり、少女は、おじいさんに説得されて出て行ったのであり、兵隊に押し出されたのではなかった。

『りゅう子の白い旗』は、「事実」とは大きく食い違っていた。

『白旗の少女』の「あとがき」には次のような文章が見られる。

沖繩戦の記録映画が公開されて以来、あの映画のなかで、白旗をもつて投降するわたしのうしろから歩いてくる兵隊さんたちが、私を盾にしてついでにきたかのように誤解されているのは、たいへん残念なことです。

この兵隊さんたちは、わたしの歩いてきた道とは別の道を歩いてきて、偶然、一本道でわたしと合流した人たちでした。そして、二本の道が一本に合流するとき、わたしのほうが先に一本道に入ったため、あたかも白旗をもつたわたしを弾よけにして、あとからついてきたかのように見えるのです。

したがって、わたしと、背後から歩いてくる兵隊さんとは、いっさい関係がなかったのです。このことは、事実として書き加えておかなければなりません。

「あとがき」は、「投稿」原稿にみられるような論調が、多く見られたことに触発されて書かれたものであるが、『白旗の少女』が刊行される前に書かれたものとしては例えば、『鉄の暴風』の執筆にあたった牧港篤三のエッセー「異常な戦場芝居」を上げることが出来る。

私は、一フィート運動（米戦争記録班撮影の戦争記録映画を一フィート百円で購入、上映活動をする）の映画で、白旗を手にした少女が歩いてくるショットに打たれた。彼女の後ろから日本兵がついてくる。正に戦場のドラマだ。子供なら射つまいと、彼女を先に立たせた日本兵の歪んだ心理。これこそ沖繩戦でなければ演じられない、深い難解性を湛えた異常な戦場芝居である。

牧港のエッセーは、「りゅう子の白い旗」によせて」として書かれたものであった。それは、白い旗を掲げて投降する少女の「ショット」を見たものの、いつわらぬ思いが吹き出たものであったといつていいだろう。

『白旗の少女』が刊行される以前、記録映画を見た多くの観客は、少女の後ろについてくる兵隊たちを許せないと思った。『りゅう子の白い旗』は、まさしくそのことをバネにして書かれていたといつていいが、「あとがき」は、それが誤解に基づくものであることを訴えたのである。

『白旗の少女』が公表されて「事実」が明らかになつても、先に引用したような投書が出てくるのは、何故か。『白旗の少女』を読んでさえいれば、そのような意見は出てくるはずもないだろうが、問題は、なぜそのような意見が出てくるのか、という点にある。

投稿に見られる論調や牧港のような文章は、沖縄の戦時、戦後史と切り離して考えることはできない。

沖縄は、日本の独立とひきかえに米国の占領下に投げ出されたばかりでなく、ベトナム戦争や湾岸戦争の際には前線基地化したこと、それが一つである。

あと一つには、沖縄戦のさなかにあった「日本軍」の言動のみならず、戦後の動向といったものがある。その典型的なあらわれを『母の遺したもの』に見ることができよう。

『母の遺したもの』の「第四部 母・初枝の遺言」は、三十三年目にして初めて「事実」を語つたものの苦悩と、「事実」を知つたことによつてなされた元隊長の「半ば暴力的ともいえる行動」とが記されているが、それは無惨としかいいようのないものであった。そこには、「命令」したかどうかの「事実」の問題を越えて、日本軍兵士であった人間の荒廃ぶりが鮮明に照らしだされていた。

元隊長の「行動」を知れば知るほど、元隊長に対する不信任感が強くなるざるをえないが、それを知らなくても、

元日本兵に対する不信感、拭い難く存在する。

『りゅう子の白い旗』は、そのことをよく示しているはずであり、その不信感が「白い旗」を巡って噴き出したといえるのである。「実相」「実録」「事実」に基づかない戦記は戦記としての価値などないが、あえて「実相」「実録」「事実」によらないことで、より深い「真実」が照らし出される場合もあるのである。

注

1 『沖繩健児隊』所収「血であがなったもの」を踏まえて書き直された『鉄血勤皇隊』でも、(生き残つてから後の或る日、フト私は増永隊長の命令とこの叱責を心の中で反芻してハツとした)云々以後の文章は削除されているが、削除は、「後でわかったこと」(『沖繩のこころ』所収「第4章 血であがなったもの」)による削除だけでなく、「飛行機に追われ周章した老人が壕に入ろうとする。そして追い出される。突き出された老人は身をかくす由もなく何時までもその付近をうろつく。すると飛行機の爆音が唸りを立てて落ちてくる。と、爆弾の恐怖に脅えた兵が照準を合わす。壕内の人々は冷たい銃口を黙ってみている。パン！ たった一発。人々はハツトする。百分の一秒の間、彼等の胸中には虫づが走る。それでも「戦争」という隠れ蓑で彼等は一瞬萌した光を押し包み、その罪悪感を真黒くぬりつぶす。しかし、それは何時までも消えない汚点となつて残る。私は一聯の糸をたぐるようにこんな事を考えていた。」といったような箇所も削除していた。

2 大田は「改めて戦争を考える」(一九八七年十二月十三日付『琉球新報』)と題したエッセーで「沖繩戦における子どもたちの苦難を如実に語るものとして、私が自ら何万枚もの写真から選んだもの」として「白旗」を掲げる少女の写真について触れていた。同エッセーは、「白旗の少女」が証言　フイート運動・映画と証言の夕

べ 比嘉富子さん投降の状況生々しく」（『琉球新報』一九八七年十二月十日）を受けて書かれたものであろう。

3 一九八五年十一月六日付『沖縄タイムス』は「1フイートフィルム基に自主映画」の見出しで、「子どもたちにフィルムを通して沖縄戦を伝える会」（通称・1フイート運動）が「沖縄戦・未来への証言（仮題）」を自主制作すると発表したことを伝えている。そして翌一九八六年四月二日には「沖縄戦・未来への証言」1フイート運動映画 題名、歌詞決まる 5月に公開 今月撮影を完了、五月十五日には「戦場の惨状つぎつぎと」沖縄戦・未来への証言」記録映画が完成 1フイート運動を集大成」、五月二十二日には「全世界への平和メッセージに1フイート集大成映画「沖縄戦・未来への証言」一般公開始まる」、五月二十六日には宜野湾、六月二日には名護市民会館、六月六日にはタイムスホール、六月八日には沖縄市民会館、六月十八日には名護市定例議会で上映されたことを伝え、六月二十二日には「1フイート映画本土上映、外国版も計画 慰霊の日講演や集いも」の見出しで、「五月二十一日上映開始して以来延べ一万七千人」を動員したことを伝えるところに、今後の上映日程として二十二日から七月九日までの会場、時間を掲示、一九八七年二月十八日には「1フイートの「沖縄戦・未来への証言」初めて海外へ渡る」として「沖縄に里帰り中のペルー日系人協会地区代表議員伊礼英夫さんがフィルムを購入、ペルーに持ち帰る」と伝えている。そして五月十七日には「沖縄戦・未来への証言」反響呼んだ「1フイート運動」の見出しで、初公開一周年と「優秀映画鑑賞会」の推薦映画に決定されたことを受けて記念パーティーが開かれたこと、「昨年五月二十一日、那覇市民会館で初上映、これまでに県内で百八十七日、四月現在で四万二千八百八十二人が観賞、広島、長崎をはじめ本土へのレンタルも七十六回を数え、一万四千人余が沖縄戦に触れている。ビデオは百五本出され、ほとんど連日のように全国各地で上映されているという」ことを伝えている。

- 4 一九八四年五月二日付『沖繩タイムス』は、壮絶な戦闘シーンも 沖繩戦記録フィルム 第一陣12本届く 1
フィート事務局反戦映画に編集化」の見出しで、「沖繩戦記録フィルム一フィート運動事務局」（仲宗根政善代
表）が二月十七日に発注した沖繩戦の未公開フィルム十二本が一日、アメリカ国立公文書館から同事務局に届い
た」こと、「一フィート運動が始まって以来、フィルムが送られてきたのは、これがはじめてである」こと、そ
して「フィルム十二本の内容は「第二次世界大戦」「首里の攻撃」「日本兵の降伏」など合計上映時間五時間弱」
であることを報じている。「白旗の少女」は、「日本兵の降伏」の中に入っている。五月五日付『琉球新報』「金
口木舌」は「アメリカから届いた沖繩戦の記録フィルムが公開され、話題を呼んでいる」と記している。
- 5 一九八七年十月二十日付『沖繩タイムス』は「生きていた「白旗の少女」 沖繩戦の記録写真 七歳戦火をさ
まよう 沖繩市池原・比嘉富子さん（48） 老夫婦の温情で助かる」の見出しで、「インタビュに応じた」こと
を伝えている。
- 6 一九八八年六月十三日付『沖繩タイムス』は「核廃絶と平和の願い訴え SSDⅢ「平和大行進 カチャーシー
で沖繩アピール 「行動する会」が力強く ニューヨーク」の見出しで、1フィートの会他三十三人が「紅型の
ハッピにカチャーシーの舞いで、沖繩をアピールした」と報じるとともに、「「白旗の少女」の比嘉富子さんは
「私を撮ったカメラマンに会いたい」と写真入りのプラカードを手に行進。沿道の人々の関心を集めた」と報じ
ている。
- 7 一九八八年七月十三日付『沖繩タイムス』は「つらい戦争だった 涙ぐむヘンドリックソンさん 白旗の少女撮
影のカメラマン 胸のつかえおろす 比嘉富子さん語りべの決意あらたに」の見出しで、比嘉が、四十三年ぶ
りに「元米軍カメラマンと六日、米・テキサス州で「再会」を果たした」ことを報じている。同紙は、また八月

十四日、ヘンドリクソンが来沖したことも報じている。

8 松本健一は「白旗伝説異聞」（『白旗伝説』一九九八年五月十日 講談社学術文庫所収）で、「白旗伝説」（『群像』一九九三年四月号）という物語において述べたのは、次のようなことでもあった」として、白旗の来歴を略記したあと「沖繩の少女が白旗を掲げたのは、かつて日露戦争に参加した老人の記憶によっているのではないかと記している興味深いものがあるが、兼城一編著『沖繩一中 鉄血勤皇隊の記録 下』（二〇〇五年九月一〇日 高文研）のなかに「波打ち際に近づいてきた哨戒艇が「日本兵のみなさん、戦争は終わりました、白旗が白いシャツをかかげて港川の方向にすすみなさい」と投降をよびかけていた」という証言があることからすると、「老人」は米軍の投降呼びかけを聞いて、「白旗」を少女に持たせたと考えられないこともない。兼城のそれにはまた、「白旗の少女」について「仲村繁は「白旗の少女」の写真を見るたびに、摩文仁で目撃したあの少女——六月二十一日仲村繁証言、二〇〇メートルぐらい離れたキビ畑のかげから、白旗をかかげたオカッパの少女があらわれた。少女のあとに十数人の民間人が続き米軍陣地に向って歩いて行く。兵隊も何人かまじっていた。投降する人たちである——ではないかと考え二つの像を重ねあわせようとするが、記事を読むとちがうような気がして同一人物だと確定するにいたっていない、と語っている。沖繩戦の末期には、少女を先頭にして降伏した例は他にもあったようで、仲村繁が目撃した少女がこの「白旗の少女」ではなかったとしても、そうした場面のひとつだったといえよう」と書いている。

9 一九八七年十月二十九日付『沖繩タイムズ』「オピニオンのページ」に掲載された「白旗の少女に改めて感激」（松堂権助）にみられる「『すくい日本兵は白旗を掲げた少女に、米軍から射撃が無いことを確認し、洞ヶ峠をきめこんで、ミ二投降使の後にゾロゾロ恥もなく追隨している』といった一節、一九八八年六月二十二日同紙「論

壇」に掲載された「白旗の少女」と「6・28」（宮城みのる）にみられる「フィルムに映し出される投降シーン」は、少女は白旗を右肩に、むしろ明るい表情で左手をふり歩み寄る。その後ろを、おびえた表情の二人の日本兵がついて来る。このあべこべな映像が、沖繩戦の実体を如実に物語る」といった一節に、「白旗の少女」の記録映画を見て、視聴者がどう感じたかがよくあらわれているよう。

補注 本稿は、二〇〇六年九月、イタリアのベネチアで開かれた国際沖繩研究大会での発表のために作成された原稿である。